

おどいあと（鷹峯旧土居町）

調査期間：令和6年6月3日（月）～ 6月21日（金）

調査機関：京都市 文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課



1 発掘調査について

調査地は、千本北大路交差点の北西約0.5kmの北区鷹峯旧土居町地内で、佛教大学の北西側にあたり、「御土居跡」に該当します（図1）。当地は西側道路よりも高く盛り上がり、御土居の盛土が残ることが想定されていました。ここに住宅建設が計画されたため、発掘調査を実施しました。調査面積は26㎡です。

2 御土居跡について

天正19年（1591）、豊臣秀吉は京都の市街地を大きく囲む全長22.5kmにわたる土塁と堀を築きました。これが御土居です。江戸時代の史料には、土塁の基底部分で幅18～28m、高さ3.6～5.4m、堀の幅3.6～18mと記されています。当時の記録には、「洛中惣構」（『滝川文書』）、「京惣堀」（『駒井日記』）、「堤（堤防）」（『兼見卿記』）と記され、盗賊の取り締まりや堤防など、京都の防衛や治安維持、治水などを目的とした惣構と認識されていたことが分かります。しかし、江戸時代に入り鴨川沿いに「寛文新堤」が築かれると、堤防の役割を果たしていた東辺の御土居を中心に削平されます。近代以降は、他の箇所でも都市化の障害となったことや、土取りの対象になったことで、次々と削り取られました。その中で残りの良かった9ヵ所の御土居が国の史跡に指定されています。

調査地は、御土居の西辺北端にあたります。この付近の御土居は、紙屋川に沿って築かれており、川が形成した河岸段丘の崖面を利用しています。一部では川を堀として利用したほか、崖面の上に築かれたことで、外側から見るとそびえ立つ城壁のように見えたと、大きな視覚的効果を狙った立地と考えられます。

3 今回の発掘調査成果

今回の調査区で、御土居の土塁盛土、堀、堤を確認することが出来ました。その結果、道路から高く盛り上がった当該地全体が御土居に関わる遺構であることが明らかとなりました（図3・4）。

土塁 土塁は盛土裾部を確認し、構築方法が判明しました。最初に地表面に幅約1m、高さ0.5mの小丘を築きます。小丘に向かって、東側から土を入れていきます。それを何度も繰り返すことによって土塁を高く積み上げていきます。土塁盛土は、調査地の高い場所まで含めると高さ約5m分が確認できました。

堀 土塁外側に幅7.3m、深さ2.3mの堀を確認しました。堀は新旧2時期あり、上層の堀の埋土には、ガラス片が入ることから、堀が埋まるのは明治時代以降であることがわかります。また、堀には水を湛えていた痕跡は認められませんでした。

堤 堀の外側には堤が築かれました。堤は幅4m以上、高さ2.5m以上あり、さらに調査区外に広がっています。

4 まとめ

今回の調査では、御土居の土塁盛土、堀、堤が良好に残ることを確認しました。中でも堀外側の堤の存在は、御土居の調査では初めての発見です。御土居の堀に堤が伴う構造は、紙屋川が形成した河岸段丘が作り出した急斜面に築かれた御土居から、蛇行する紙屋川が離れる西辺北端の一部分に限られた極めて特徴的な構造といえるでしょう。御土居の土塁盛土は、高さ約5m分を確認しましたが、周辺事例から本来はさらに2～3m高かったと考えられ（図5）、崖面の上にそびえたつ御土居の威容が偲ばれます。（西森 正晃）

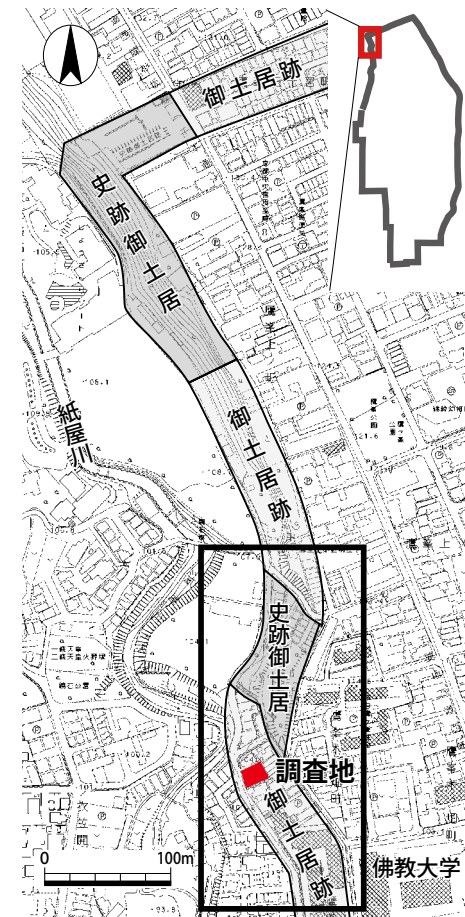


図1 御土居と今回の調査位置図
（□は図2の範囲）



図2 調査地付近の御土居「京都惣曲輪御土居絵図」（京都大学総合博物館所蔵）に加筆



図3 堀と堤（東から）



図4 土塁盛土断面（西から）

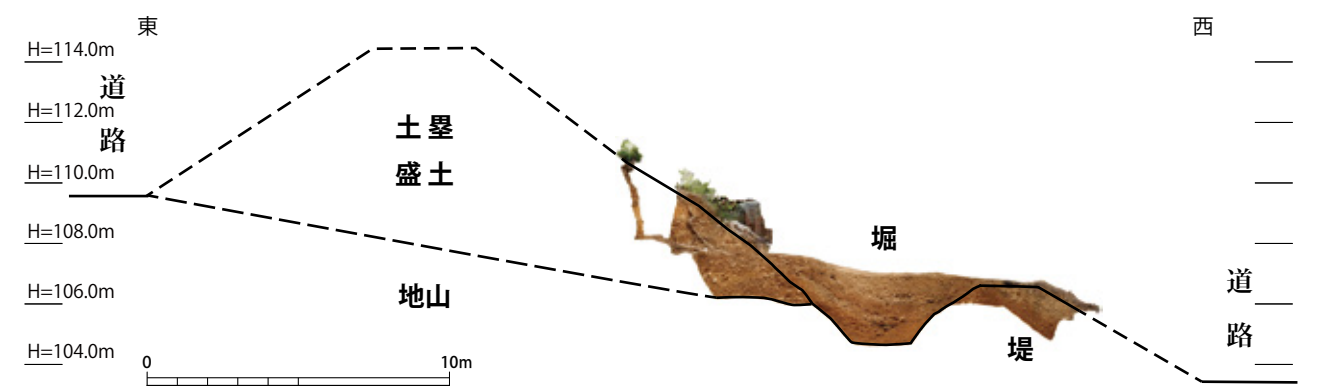


図5 御土居断面模式図と調査地南壁オルソ写真